

日本語の柔軟性に関する一考察

A Study on the Flexibility of the Japanese Language

*張 東亜

ZHANG DONGYA

**浙江経貿職業技術学院

要 旨

本稿は、日本語の言語として持っている柔軟性について考察する。結論として、日本語は、変化する世界に適応しようとする姿勢を持ちながら、ものまね文化から独自の改良が得意な、さまざまな状況に対応できる柔軟性の高い言語であると考えられる。また、日本語は世界で最も曖昧な言語の一つであり、造語力が強く、文法の自由度が高く、豊かな表現力を持つと同時に、体系的に整備された敬語表現などの特徴も持っている。

外国人を対象に日本語教育を行う際の注意点として、日本の文化を理解することと、学習者のニーズに合わせた日本語教育を提供することの必要性について論じた。特に、日本語に日中同形異義語と同形類義語が多く存在しているため、中国話話者とのコミュニケーションを行う場合は十分に注意を払う必要がある。

I. はじめに

日本の1960～70年代の高度な経済成長やアニメの世界的な人気に伴い、日本語も世界的に注目を集めるようになった。また、日本は街の清潔さや社会の優しさなどが高く評価され、世界でも有名な観光立国となった。これによって、外国人との交流が増加し、国際化が進展することで日本語もより世界に通じる言語に変化し、ビジネスや観光など様々な分野で必要性が高まるようになっている。

このような状況の中、海外で日本語を学ぶ人が増加し、日本語教育は盛んになり、日本語能力検定試験が世界中で行われている。こうした背景から、日本語の特徴を再認識することは、日本語教育に役立ち、結果として日本との国際交流の促進に繋がっている。

言語は人間の意識形態の一現象であり、社会の違いから異なる言語が生まれる。人類学、民族学、社会学などの研究者は社会構造のモデルを提唱する際に、当該社会の言語的特徴を根拠とすることがある。⁽¹⁾ 風土と言語は密接な関係があり、和辻哲郎や梅棹忠夫などはそれぞれ独自の分類を提唱している。^{(2) (3)} モンスーン地域に立地する日本社会から生まれた日本語は、穏やかで優しい社会から誕生したため、柔軟性を持ち、以下のような特徴があると思われる

*張東亜 愛知東邦大学客員研究員

**浙江経貿職業技術学院は、愛知東邦大学の学術交流協定大学である。

る。

II. 日本語の柔軟性の特徴

1. 変化する世界に適応しようとする言語

日本語は常に海外の先進文明を取り入れ、進化する特徴を持つ言語である。

日本は島国であるため、海外との交流が難しかった。しかし、かつて文字のない話し言葉しか存在しなかった日本は、遣隋使や遣唐使を通じて古代中国から当時の最先端の文明や科学技術などを取り入れると同時に、表意文字の漢字や漢語もどんどん導入した。明治時代にはヨーロッパ文明、第二次世界大戦後にはアメリカ文明を取り入れた。

このように、日本は時代に応じて世界最先端文明を取り入れることで、先進文化圏の仲間入りを果たした。日本語も、話し言葉しかなかった言語から、漢字、ひらがな、カタカナ、アルファベットの4種類もの文字体系を持つ広範な言語に進化した。

こうして生まれた日本語は、外来語の導入に寛容であり、漢語や欧米語などの語彙を積極的に取り入れる一方で、日本独自の表現や文化に根ざした言葉も大切にしながらバランスよく進化している。

例えば、ポルトガル語から派生した外来語といえば、パン、バッテラ、カステラ、チャルメラ、かるた、かぼちゃなどが挙げられる。また、フランス語からのズボンやクーポン、オランダ語からのガラスやポン酢、サンスクリット語からのお彼岸や瓦（かわら）、ロシア語からのカンパやノルマ、ドイツ語からのアルバイト、英語からのサラリーマンや牛・豚などのハツもその例である。

近年では、インターネットやSNSなどの普及により、特に若い世代を中心に新しいスラングや略語が生まれ、日本語は常に変化し続けている。このような変化に適応しようとする動きも見られ、ネット時代に適した新たな表現や語彙が生まれている。また、新しい科学技術や文化、言語などの変化に追隨して新しい言葉や表現を生み出すこともよくある。

ただし、日本語の変化には批判的な意見も存在する。例えば、漢字や漢語、敬語などの使用が減少していることが懸念されている。これは、日本語の歴史的及び文化的背景を反映したものであり、それらの要素が使われなくなるとは日本語の豊かさや伝統を損なうことになるかとされている。そのため、日本語の変化については、歴史や文化を尊重しながら、バランスよく進化させることが必要であると思われる。

2. ものまね文化から独自の改良が得意な言語

日本語は、誕生して以来、常に変化し続ける言語であり、中国語から生まれた漢語も欧米からの外来語も、日本に根付き日本独自の使い方や意味が生まれてきた。

日本のものまね文化により、日本語は独自の改良を得意とする言語であり、外来語を取り入れる場合、日本語の音韻や文法に合わせて改良したり簡略化したりすることで、日本語独自の表現が生み出されている。

例えば、「ラジカセ」や「パソコン」のように、それぞれ英語の「radio cassette recorder」と「personal computer」が元となった語彙が日本独自の語彙として定着した。

また、文字が存在しなかった古代の日本は古代中国の漢字を導入した。そして漢字を表音文字として大和言葉を表記し、記録していく過程で日本独自の国字やひらがなとカタカナが作り出された。

国字は日本人が作り出した日本独自の漢字体の文字であり、「峠、榊、畑/畠、辻」など古代に作られたものと、「膝、腺、脛、趾、秆、蚝」など近代に作られたものに識別される。⁽⁴⁾しかし、欧米文明の導入とともに、カタカナ語が増えてきたため、日本語は漢字離れ傾向になっている。

このように、ものまね文化から独自の改良をしてきた日本語は、数千年前から使われてきた大和言葉をひらがな、硬い書き言葉を漢語、欧米の言葉をカタカナで表現することで、豊かな表現力を持つ複雑で難解な言語となった。

3. 造語力の強い言語

日本語は造語力の強い言語であると言われている。

その理由の一つとして、日本語には、漢字や仮名を組み合わせる新しい単語を作り出すことができるという特徴がある。特に日本独自の文化や技術に関する単語も、漢字や仮名を組み合わせる作られたものが多く、その造語力が日本語の表現力を豊かにしている。また、外来語を日本語の音韻などに合わせて作り変えることで、日本語独自の表現が生まれている。

例えば、「カラオケ」や「スマホ」は、外来語を日本語に取り入れた造語の代表例である。また、エアコン、リストラ、アニメなど略語の和製英語もあれば、野球、郵便、意識、進化、電話、哲学などの和製漢語もある。さらに、食パン、合コン、ピー玉など漢字とカタカナを混用した造語もあるし、ググる、ダブる、デモる、デイスる、メモる、けちる、牛耳る、皮肉る、日和る、偉ぶる、大人ぶる、高ぶる、田舎びる、大人びる、愛する、チンする、枕するなどのように、かなや漢字に「る、ぶる、びる、する」をつけることで名詞を動詞化する和製語も多く存在する。それに、外来語の略語が新しい単語の構成要素となり、新しい単語を作り出す過程についても研究されている。⁽⁵⁾

ただし、日本語の造語力が強い反面、新しい単語を使い過ぎることで、意味が薄れたり、混乱が生じたりすることも指摘されている。英語の世界的な影響力が増す中、英語の語彙が日本語に流入して外来語の増加が見られる一方で、適切な造語の使用法や意味の共有が重要であることも指摘されている。⁽⁶⁾したがって、新しい単語を作り出す際には、その単語が社会でどのように受け止められるかを慎重に考慮する必要があると言えよう。

4. さまざまな状況に対応できる柔軟性の高い言語

日本語には、一つの単語が多くの異なる意味を持つ場合がある。一方、同じ意味を表す単語や表現でも、そのニュアンスや使用される場面によって微妙に異なる使い方が選ばれることもある。そのため、日本語をマスターするには、単語や表現の意味だけでなく、それらの微妙な違いにも注意を払う必要がある。

例えば、日本に「出世魚」という表現がある。「出世魚」とは、稚魚から成魚まで成長するにつれて大きさや姿、味わいだけでなく、名前や価値も変わるとされている魚のことを指す。そして、地域によって呼び名が異なる場合もある。さらに、成長に合わせて釣り方も異なり、店頭に並ぶ際には、大きさなどによって別物として扱われることもあると言われている。

日本語には一人称代名詞として、「わたくし、わたし、あたし、うち、こちら、自分、当方、俺、僕、拙者、小生、不肖、愚生、小弟、手前」など、様々なニュアンスが含まれる表現が存在し、場面や相手によって一人称が変化したり省略されたりすることで、相手に伝えるイメージが変わるという点も、他の言語と比較して珍しい特徴の一つである。

また、漢字、ひらがな、カタカナ、アルファベットなど、異なる文字を組み合わせることで、豊かな表現が可能であるため、日本語は柔軟性の高い言語と言える。

日本語の普通の表記方法は、漢字と仮名との和漢混交文である。ひらがな、カタカナ、漢字、アルファベット、日本語はこのような4種類の文字が混在する複雑な言語であるが、日本人にとってはこれらの文字を自然に使いこなせる言語である。このように異なる種類の文字が混在することは、他の言語にはない独自の特徴である一方、言語の表現力を大きく広げる要因ともなっている。この4種類の文字は場合によって使い分けられ、それぞれ微妙なニュアンスの違いが見られる。

下記の例文で見ることにしよう。

- (1) 「かわいいですね。」
- (2) 「カワイイですね。」
- (3) 「可愛いですね。」
- (4) 「KAWAIIですね。」

上記のように、4つの表記方法により、同じ意味を表す単語や表現でも、微妙なニュアンスの違いが生まれ、文字情報として受け手に伝わるイメージも異なる場合がある。

それから、「能力、力、パワー」、「散歩、歩く、ウォーキング」のように、それぞれ漢語、和語、外来語の違いから、異なるニュアンスが伝わってくる。即ち、日本語は同じ文章でも、書かれたものと実際に聞いたものとで、印象が大きく異なることが多い言語であると言える。

現代の日本語の基礎となるひらがなは漢字の草書から生まれたものであり、スムーズで優しいイメージがある。一般的に、学校での文章や日記のようなプライベートな文章にはひらがなが多く使われるが、公式な文書などは漢字を中心に使用することが求められる。ただし、近年では、若者文化やSNSなどの影響により、ひらがなを多用した文章が増えている傾向が見られる。

それに対し、カタカナはもともとは中国から伝わった漢字の一部を取って作られた文字であり、漢字との関連性があるなどの理由から、外国の人名や地名、外来語の表記に適しているとされている。外来語の読み方を表記する場合、カタカナを使うことが一般的である。ただし、欧米からの外来語を表記する際には、アルファベットの読み方を使うこともある。

5. 文法の自由度が高い言語

日本語は比較的、文法の自由度が高いため、様々な表現が可能である。例えば、「私は昨日、公園を犬と散歩しました」という文を考えてみよう。

この文は、日本語の文法に従って、「私は」が主語、「昨日」が時間を表す副詞、「公園を」が場所を表す副詞、「犬と」が動作の相手を表す格助詞「と」とともに動物の名詞、「散歩しました」が動詞という形になっている。

しかし、この文の「私は」は、中国語や英語のように必ずしも必要ではない。そのため、「昨日、公園を犬と散歩しました」というように、主語を省略しても意味が通じ、文法的にも問題はない。

また、日本語では文章や会話の流れに合わせて助詞を省略したり変えたりすることで、より豊かな表現が可能になる。例えば、

(5)「ご飯食べた？」(「を」が省略されている)

(6)「今日新宿行く？」(「に」、「へ」が省略されている)

このように、口語的な表現では助詞が省略されることがよくある。

文章や会話の流れに合わせて助詞を変える例文としては、以下のようなものを挙げることができる。

(7)「今日は栄にへ行きました。」

(8)「今日は栄で買い物しました。」

「～は～です」は、日本語における代表的な述語文の形式の一つで、多くの場合に用いられる。次の例を見てみよう。

(9)「王さんは留学生です。」

(10)「僕はうなぎだ。」

「王さんは留学生です」は普通の使い方であるが、いざ「僕はうなぎだ」になると、多くの外国人の初心者が頭を抱える変な日本語になってしまう。日本語には、このような身近な存在でありながら大変奥の深いものがたくさんある。日本人は、当たり前のように気づかないで使っているが、よく考えてみると、この「うなぎ文」⁽⁷⁾のような不思議な表現が多く存在している。

このように、日本語では主語が明確でなかったり、助詞が省略されたり変えられたり、文型をいい加減に使ったりする場合がある。他の言語と比べるとより自由な印象を受ける傾向がある。日本語は一般的に文法が自由な言語とされているが、実際には文法のルールや決まりが存在し、このような自由度があるということは、正しい文法のルールを守りつつ、文章を作るという意味での自由度が高いということである。

6. 表現力が豊かな言語

日本語は表現力が豊かな言語である。4種類の文字を持つのが原因の一つであるが、擬音語や擬態語、熟語、諺などが豊富に存在することも重要な要素となっている。特に擬音語や擬態語は非常に多く存在し、感覚的な表現やイメージを伝えることができるため、外国人にとっては難しい要素となっているが、それは日本語の表現力の豊かさを特徴づける一つと言える。

一般的に、擬音語と擬態語は総称してオノマトペと呼ばれる。擬音語は、「ゲラゲラ、ワンワン、サラサラ」のように人や動物、物などが発する音を表現する語を指し、擬態語は、「ワクワク、セカセカ、ニコニコ」のように本来なら音のない心情や雰囲気、状態などを表現する語を指す。例えば、ドアを叩く音を「コンコン」と表現したり、兎の跳ねる様子を「ピョンピョン」と表現したりする。

日本語のオノマトペは多様性や複雑性を持っている。例えば、雨を表すだけで、ぽつぽつ、ぽつりぽつり、ぽつんぽつん、ぱらりぱらり、ほとほと、ほとりほとり、ほとんほとん、ほてほて、びしょびしょ、びしょびしょ、さーっ、わーっ、ばーっ、しっとり、じっとり、しとっ、じとっ、しとしと、じとじと、しめじめ、じめじめ、しょぼしょぼ、しぼしぼ、しぼしぼ、しおしお、じくじく、じみじみ、びちよりびちより、びちよびちよ、ざあざあ、ざんざん、どしゃどしゃ、じゃあじゃあ、ぴちゃぴちゃ、ぴちゃぴちゃ、ざんざんざんざん、さらさら、ざんざら、ざぶんざぶん、ぼたぼた、ぼたぼた、だらだら、はらはら、ぱらぱら、ぱらぱら、ぴちぴち、ちゃっぷちゃっぷ、ちゃぽん、ちゃぽちゃぽ、ちゃぶりちゃぶり、ぴちゃり、ぴちゃん、ぐっしょり、べしょべしょ、べちよべちよ、べちよべちよ、びっとり、びちちち、べったり、べちちちなど、多くのオノマトペが存在する。これにより、日本語は多様性や複雑性を持

つ言語となり、その特徴が日本語の難しさや魅力を形成している。

また、日本語には「矛盾、破天荒、一衣帯水」といった古典的な熟語や四字熟語なども多く存在し、意味の深さや広がり表現することができる。さらに、「早起きは三文の得」や「噂をすれば影が差す」、「腐っても鯛」のような古くから言い慣れた諺も日本語の重要な要素となっている。

日本語は様々なコミュニケーションシーンや文化的背景に応じて、多様な表現方法を持っている。このような多様性は、日本語の柔軟性と言える。柔軟性の高い日本語には、コミュニケーションを円滑かつ豊かにするメリットがある。また、お互いの意図やニュアンスを正確に伝えることも可能である。

7. 世界で最も曖昧な言語

日本語は世界で最も曖昧な言語の一つだと言われている。「空気を読む、行間を読む、阿吽の呼吸、暗黙の了解、以心伝心、一を聞いて十を知る、腹芸、シンクロ、コンビネーション、息ぴったり、目は口ほどにモノを言う、沈黙は金、無言のアピール」などのように、はっきり言わずに察し合う「あいまいさ」が日本語の持つ最大の特徴の一つである。

「かわいい」という言葉は、日本語でよく使われる表現であり、多くの場合、曖昧さも多く持っている。特に女性同士の会話などでは、「かわいい」という表現が頻繁に使われる。一般的には、「かわいい」は愛らしく美しい外見を表現する際に使用されるが、場合によっては可愛らしさ以外の意味を表すこともある。しかし、この場合は、外見の美しさなのか、相手の性格や行動を褒めているのか、単なる相槌なのか、文脈によって解釈が異なり、曖昧さが生じることがある。

「一緒に食事に行きませんか」のように、日本人が人を誘う際に、肯定ではなく否定の言い回しをするのは、相手は用事があるかもしれない、相手を困らせないための思いやりの心からである。また、断る際も直接的には言わずに、曖昧な表現を使うことが一般的である。

「かな、けど、が、だろう、かもしれない、と思うけどね」など、語尾を言い切らない曖昧な表現は、日本語特有の表現方法である。また、主語が省略されている場合でも、文脈からだれを指しているかが分かる。

さらに、「いいです」や「結構です」は、その場の状況によって肯定か否定かが変わる。「はい」や「そうですね」は英語の「YES」とぴったり対応するのか、「ちょっとそこまで」は具体的にどこを指すのか、「また今度」や「そのうち」はいつになるかなど、これらのような曖昧さと言い回しは日本語の特徴であると同時に、日本独自の優しさでもある。

曖昧な表現は、外国人が日本語を学ぶ上での問題点としてよく指摘される。そのため、外国人向けの日本語教育では、文脈を理解するための訓練が重要視されている。また、外国人とコミュニケーションをする際には、より正確な表現を使うことが求められる。

8. 体系的に整備された敬語表現

日本語には、相手や状況によって話し方や表現が変わる敬語表現がある。敬語は、尊敬の意を表したり、謙譲の意を表したりするために使われる。それは、日本社会の「ウチ、ソト」文化に深く根ざしているため、使い方に十分な注意が必要である。

一般的に、日本語の敬語は尊敬語（「いらっしゃる、おっしゃる」型）、謙譲語Ⅰ（「伺う、申し上げる」型）、謙譲語Ⅱ（丁寧語とも呼ばれる「参る、申す」型）、丁寧語（「です、ます」型）、美化語（「お酒、お料理」型）の5種類に分けられている。⁽⁸⁾

敬語は、日本語において重要な役割を果たし、相手との上下関係や距離感、信頼関係、尊重の念などを表すことができる。敬語を使いこなすことで、相手に好印象を与え、円滑なコミュニケーションを築くことができる。

ただし、敬語を過度に使用すると、逆に相手との距離を感じたり、不自然な印象を与えてしまうこともある。そのため、敬語の使い方は、相手や状況に応じて適切なレベルで使い分けることが大切である。

近年では若い世代が、距離感を縮めるための「砕けた敬語」を使い始めている。少し敬語を崩すだけで、話し方や伝え方の幅が広がり、敬意を表しながら人との距離を縮める効果もあると言われている。

体系的な「敬語表現」の存在は、語族に関係なく、アジア諸言語の多くに共通する特徴と言われている。日本語をはじめ、ジャワ語、チベット語、ベトナム語などがその例である。⁽⁹⁾ 特に朝鮮半島においては、非常に複雑な敬語体系が存在することが知られている。その源流は、上下関係に厳しい儒教文化に由来するとされている。⁽¹⁰⁾ ただし、「それがいかにも日本語にしかない特殊な現象と見られることがあるのは、その言語的手段が言語表現としてだけでなく、特定の社会的、心理的距離に対応する特定の言語形式が組織的に整備されているからである日本語のように体系的な敬語表現を持っている言語は少ない」と言われている。⁽¹¹⁾

世界中の人々が初対面で挨拶する際の文化や習慣を比較すると、日本人は「礼儀」と「ねぎらい」という側面を重視する傾向がある。頭を下げるお辞儀文化は、中国から仏教とともに伝わったとされており、当初は攻撃的な意図がないことを示すために行われていた。⁽¹²⁾

これらの観点から、二つの考察ができる。

一つ目は、お辞儀文化が儒教文化や仏教との関係についてである。仏教が広く布教されている国として、中国、日本、タイ、ベトナム、ミャンマー、スリランカ、インド、カンボジア、韓国などが挙げられるが、これらの国々でお辞儀文化がどれほど発達しているかを確認する必要がある。もし発達していない場合、なぜ日本においてお辞儀文化が特に発達したのかを探究する価値があると考えられる。

二つ目の考察は、敬語の発達した度合いとお辞儀文化の関係についてである。例えば、ほとんどの西洋の国々では初対面の人でもキスやハグをしても問題ないが、日本では距離を置いてお辞儀をすることが普通である。このように体に接触することを通じて歓迎や感謝の気持ちを表現することができないため、敬語やお礼の言葉などが発達しているかと考えられる。

以上の二つの問題については今後の研究課題としてさらに深める必要がある。

Ⅲ. 外国人に対する日本語教育の注意点

日本語の柔軟性は、日本語教育においても重要なテーマとなっている。日本語を学ぶ外国人にとって、日本語の柔軟性を理解することは、より自然なコミュニケーションをするために必要不可欠である。

また、日本語の柔軟性は、日本語能力試験（JLPT）などの日本語能力評価にも反映されている。JLPTでは、リスニング力や読解力において、様々なトピックに関する質問に対する回答や自分自身の意見を表現することが求められる。このような場面においても、日本語の柔軟性が問われる。

外国人向けの日本語教育においては、以下のような注意点がある。

1. 文化の違いを理解すること

日本語教育においては、言語そのものだけでなく、日本の文化や習慣、風習など社会的な背景に対する知識や理解を深めることが大切である。日本語は、言語としての魅力だけでなく、文化的かつ歴史的な蓄積も重要な要素であり、日本文化や思想を反映するものでもある。特に、外国人にとって異なる文化的な壁があるため、言葉や表現の意味やニュアンスを正確に理解することが必要である。そのため、日本語を学ぶことは、日本の歴史や文化、社会を学ぶことでもある。

日本の歴史や文化、社会についての理解は、日本語学習者にとって非常に重要である。例えば、日本語の敬語や言葉遣いは、日本社会の階層や構造、人間関係の考え方と密接に関連している。また、日本の文学や映画、音楽などの芸術を楽しむことで、日本語の表現やニュアンスをより深く理解することもできる。

その上、国際的なニーズに合わせた教材や教授法も導入され、日本語を学ぶ外国の人々にとってより使いやすくなっている。このような変化は、日本語を世界でより使いやすい言語にすると同時に、日本の文化や価値観をより多くの人々に伝えることにも繋がっている。

2. 学習者のニーズに合わせた日本語教育の提供

外国人向けの日本語教育においては、学習者のニーズに合わせた多様な教材やカリキュラムなどが求められている。また、日本語教育のためのアプリ開発なども進められている。近年では、いろいろなテクノロジーの活用が進んでおり、オンライン学習や教育アプリを活用することで、自分のペースで学習できる環境が整備されている。例えば、インターネットやスマホを活用したオンライン授業や、TikTokやBilibiliのショートムービー、AIを活用した自動評価システムなどが開発されており、効率的かつ質の高い指導が期待されている。

日本語教育において、漢字や仮名の書き方、読み方などを教えることが重要視されている。特に初心者の場合は、基本的な文法や語彙を教えることが重要である。しかし、日本語には文法や語彙の難易度が高い部分もあり、初心者にとってハードルが高い言語の一つである。そのため、日本語を学ぶ場合は、継続的な学習と実践が必要となる。

したがって、現在の中国では、文法、語彙、読解、会話の練習を中心に、実践的な課題を通して、実践的なスキルを身につける方法が多く採用されている。指導方法として、日本語の読み書き、文法、会話などを教える従来の方法から、より良いコミュニケーション能力や自己表現力を重視した方法へと変化することが求められている。

日本語教育における指導方法も重要な課題である。文法的なアプローチだけでなく、日本の文化や習慣に関する理解や文化的なアプローチも含まれる。このような文化的な要素も、より自然なコミュニケーションを行うために重要とされている。例えば、実際のコミュニケーションシーンに近い形を想定した練習問題や演習、自分自身の意見を表すための表現方法の確立が重要である。また、日常会話だけでなく、ビジネスシーンに必要な日本語の表現力やマナーについても学習する必要がある。

JLPTは、日本語を外国語として学ぶ人たちの日本語の能力を評価するためのテストであり、日本での留学や就職、生活などに役立つ日本語能力の資格とされており、世界的に認知され広く受け入れられている。したがって、グローバル化や多文化共生社会において、JLPT受験のための指導も求められているため、その点も考慮されるべきである。

3. 日中同形異義語と同形類義語

漢語は中国語から生まれてきたにも関わらず、日本語化していくことにより、原語の中国語と違う使い方、異なる感覚の表現となっている。

日中両国の言語には、大量の同形異義語や同形類義語が存在している。

同形異義語とは、同綴異義語とも言われ、同じ綴りでありながらまったく異なる意味を持つ単語のことを指す。同形類義語とは、形が同じであり、意味の一部も重なっているが、両者の間に微妙なニュアンスの違いがある単語のことを指す。

しかし、母語干渉等の原因で、中国語話者の日本語学習者や日本語話者の中国語学習者には、言語の負の影響（負の干渉）が多く見られる。以下に示す6つの例文を見てみよう。

- (11) () 彼は深刻な顔をしている。
() あのことによって、深刻な教育を受けた。(深い)
- (12) () 娘は莫大な慰めを与えてくれた。(大きい、大きな)
() 莫大な量の書物から調べる。
- (13) () 彼は人の顔色を見て物を言う男だ。
() この服の顔色は好きじゃない。(色)
- (14) () 彼は国のために身を犠牲にした。
() 彼は国のために犠牲した。
- (15) () 私は今の生活が安定だ。
() 私の今の生活は安定している。
- (16) () 彼は今専心に勉強している。
() 彼は今英語の勉強に専心している。

上記の×で示している6つの例文は、中国語話者の日本語学習者がよく間違えて使っている誤用表現である。なぜなら、中国語ではそのような使い方や意味があるため、そのまま日本語に翻訳すると誤解を招く場合があるからである。逆に、日本人の中国語学習者にも中国語の誤用表現がよく見られる。例えば、「訂正」という言葉は、日本語でも中国語でも使っている。しかし、日本語では「ご訂正のほどお願い致します」とか、「先生がご訂正くださいました」といった他人の間違いを直す場合と、「訂正いたします」のように自分の間違いを直す場合の両方の使い方がある。一方、中国語ではほとんどの場合、自分の間違いを修正する場合にしか使わず、「作文の間違いを訂正しなさい」のように、先生が生徒に対して指示する使い方が一般的である。ただし、上司などに向かってその人の間違いを直してほしい場合は、「訂正していただけますか？」など、敬語を使って謙遜を表す場合もある。

また、「一定、好意、温存、頑固、元旦、現出、愛人、丈夫、大丈夫、出世、娘、老婆、頒布、遭遇」など、形が同じで意味や使い方が異なる漢語がたくさん存在する。さらに、「制限、段階、平和、運命、探偵、脅威、情熱、紹介、物事、言語、苦痛、余剰、詐欺、面会、絶滅、敗戦、兵士、夜半、正々堂々、由縁」のように、中国語とは漢字の語順が逆であっても、意味が同じ単語が多数存在する。

したがって、同形異義語や同形類義語など、日中間の言語の違いを意識して正しく理解し、使用することが大切である。

IV. おわりに

日本語は、昔からのものまね文化から文字や語彙などをうまく改良し、常にその時代における最先端文明を取り入れることで、変化を続けている世界に適応しようとしている。そして、日本語は助詞をうまく使うことで言いたいことを的確に表現することができる柔軟な言語とされている。また、漢字やひらがな、カタカナといった文字体系が複合しているため、異なる言葉を組み合わせて新しい言葉を作ることができる。この特徴は、特にITやコンピューター関連の分野での新しい用語の創出においてよく見られる。

日本語は多様な表現やニュアンスを含み、文化的背景や社会的状況に応じて使い分けられる柔軟な言語と言える。同じものでも、文脈や場面によって異なる単語を使うことがある。また、熟語、諺など、日本語独特の表現方法が多く存在する。さらに、体系的に複雑な敬語もあり、その使い分けも重要である。

日本語の柔軟性は、音声や表現方法、語彙などの多様性にも表れている。例えば、日本語には擬音語・擬態語と呼ばれるオノマトペ言葉が豊富であり、感覚的にイメージを伝えたり、音を表現することができる。また、日本語は世界で最も曖昧な言語の一つでありながら、表現力の高い言語でもある。これらの特徴は、表現の幅を広げるだけでなく、文化や感性の共有を促進する役割も果たしている。

日本語教育においては、これらの柔軟性や特徴を生かした指導が求められる。例えば、日本語の構造や文法、規則を厳密に把握することはもちろん重要であるが、実際に使われる表現やニュアンスにも注目する必要がある。また、日本文化や日本人の価値観を理解することで、より適切な表現やコミュニケーションができるようになる。それに、同形異義語や同形類義語の使い方にも注意が必要である。

総じて、日本語の柔軟性や特徴は、日本語が世界的に高い評価を受ける要因の一つである。日本語教育においても、これらを生かした指導方法やテクノロジーの活用が求められる。

参考文献

- (1) 廣瀬幸生&長谷川葉子 (2019) 『日本語から見た日本人』 開拓社
- (2) 和辻哲郎 (1979) 『風土：人間学的考察』 岩波文庫
- (3) 梅棹忠夫 (1957) 『文明の生態史観』 中央公論社
- (4) ウィキペディアフリー百科事典. “国字”. <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%BD%E5%AD%97>
- (5) 孫佳瑞 (2022) 「現代日本語の略語法に関する研究:外来語由来の造語成分を中心に」, 『日本語と日本語教育』 No50 (2022.3), p 115-115. 刊行50周年大学院文学研究科日本語教育学分野修士論文要旨, 慶應義塾大学学術情報リポジトリ
- (6) 久屋愛実 (2021) 「英語由来語彙を公共コミュニケーションでどう運用すべきか—国調査のデータを活用した福祉言語学的考察—」, 『計量国語学』 33 (3), p 130-145
- (7) 奥津敬一郎 (1978) 『「ボクハウナギダ」の文法』. くろしお出版
- (8) 文化審議会 (2007) 『敬語の指針』
- (9) Sohrab, A. (2008). 「ペルシア語における敬語表現：素材敬語を中心に」 『言語社会』, 2, p 456-438.
- (10) 尾崎喜光. “外国語にも日本語と同じような敬語はあるのでしょうか”. 言葉研究館. 2022-02-24.<https://kotobaken.jp/qa/yokuaru/qa-160/>, (参照2023-02-16)
- (11) 大野晋, 柴田武編 (1977) 『日本語・敬語』 岩波講座第4巻, 岩波書店
- (12) にほんご日和. “日本の挨拶の習慣と起源。その他各国の挨拶は?”. 2019-11-15.<https://haa.athuman.com/media/japanese/culture/1477/>, (参照2023-02-16)